古典の現代語訳試案

――『竹取物語』〔帝の求婚〕段を例に――

関　一雄

古典の現代語訳は、外国語文献を翻訳するのとは異なり、同じ日本語が何千年・何百年を経て変化した結果を示すものであることは言うまでもない。

研究者にとっては、提示された本文の現代語訳は必ずしも必要でなく、その箇所のいわゆる「大意」であったり、個々の語句の「注」があれば、ほぼ充分と言う場合が多いのでないか。

しかし一般の古典愛好者にとっては現代語訳があった方が分かりやすく親しみやすい。実際に古典の刊行書には、現代語訳が付されているものが多い。一般の読者は、本文と現代語訳を読み比べながら、本文の表現に可能な限り近づこうとする。その場合、現代語訳が当該の作品の表現技法を完全とまでいかずとも、一定程度反映していることが求められるのではなかろうか。

韻文（和歌・俳句・川柳など）においては、定型（音数律など）であることが、表現技法とも言えようから、現代語訳はあくまで便宜的なものに止まるであろう。しかし、散文であれば、定型に関わらないから、本文の表現技法を反映した現代語訳は不可能ではない。

ここに取り上げる『竹取物語』は、本文中の和歌を除けば、散文の地の文と会話文であり、しかも会話文には、その始まりの直前と終わりの直後に明確な語句が記されており、地の文と会話文の表現技法の相違も明らかである（注1）。

地の文は、語り手（『竹取物語』にあっては「作者」としてよかろう）が、物語中に登場する人物の動き（演技）とその場面（背景）を時の流れに沿って描き上げていくものである。会話文は、登場人物（役者）のセリフであるが、そのセリフには、役者の役柄にふさわしい個性・キャラクターを示す語が使い分けられている。

地の文の「けり」

本稿に取り上げる〔帝の求婚〕段は、物語の後半の一部分であり、読者は物語冒頭段の「けり」の繰り返しによって、物語世界の「過去」が、あたかも現在であるかのような感情移入を経ているので、当段の始まりには「けり」は用いられない（注2）。しかし段の前半部分に三箇所「けり」が近接して用いられている。この「けり」による表現技法は、次のように解される。すなわち、帝の使者である内侍の房子が、竹取の翁邸にまで出向いて、かぐや姫に帝のご意向を告げたのに対し、姫は不機嫌で「侍り」を用いない「タメ口」で

断った場面の始まりで［をろそかなるやうに言ひければ］と「けり」が使われている。そしてそのことへの内侍の怒りのセリフの説明に［言葉はづかしく言ひければ］と「けり」を用いて表し、その報告を受けた帝が、一旦は求婚を諦める三つ目の［止みにけれ（ど）］で「けり」を用いるという表現技法である。（後述するが、この箇所を……で囲って示す。）

また、地の文の「けり」は、この段の最後に五箇所用いられ、当該段の区切り（終わり）を示している。（同じく、……で囲う。）

この「けり」を**現代語訳では、「た」**と訳す。多くの刊行書には本文中の完了の助動詞「つ」「ぬ」も「た」と訳しているものが多いけれど、「けり」との差異を表すため、本稿の現代語訳では、「つ」「ぬ」は訳出せず、現在形で訳すことにする。

会話文の「侍り」と役柄語としての天皇語

「侍り」は、登場人物が、聞き手に対しへりくだり、聞き手を尊敬する丁重表現として用いられることが多い。ところが、当該段では、帝が聞き手の竹取の翁・嫗の動作に「侍り」を用いている。これは聞き手をへりくだらせることによって、自らを尊敬する「自敬表現（自己尊敬）」となる。自敬表現は、帝に限らず大納言や中納言が家来に向かってその動作に「奉る」「申す」「まうづ」などを用いているのも同じと言えるが、帝の用いる「侍り」は際立っている。さらに帝は、帝自身の動作に「おはします」「聞こしめす」「賜はす」「行幸す」などの尊敬語を用いている。まさに「天皇語」である。

以上は旧稿〔注1〕で述べたことであるが、本稿の現代語訳にはこれにこだわって、書体等を変えて示すこととする。

（注1）拙稿「『竹取物語』の会話文―「侍り」をめぐって―」（「山口国文」第39号〈二〇一六年〉）

（注2）拙稿「『竹取物語』〔かぐや姫の生い立ち〕の表現技法―特に「ちご（児）」に注目して―」（「山口国文」第41号〈二〇一八年〉）

現代語訳と本文の傍線・点線及び書体等

Ⅰ地の文で「けり」が繰り返し用いられている箇所にはその部分を点線……で囲って示す。「けり」の現代語訳は「た」（上記のように二重傍線で示す）。

Ⅱ会話文で翁・姫が帝に向かって用いる「侍り」は現代語訳では、そのセリフ全体を行書太字体で示す。かぐや姫は、場面に応じて、翁・嫗に向かっても「侍り」を用いるが、同じく行書太字体で示し、「侍り」を用いない「タメ口」（明朝体）と区別する。

Ⅲ会話文での帝の自敬表現は、その語句のみをゴジック太字体で示す。

Ⅳ地の文・会話文の現代語訳では、本文にはないが、現代語訳で補った語句は（　）で括って示す。

◎現代語訳の後に本文を添える。堀内秀晃「新日本古典文学大系」によるが、一部当該本文の漢字表記を底本の仮名表記に直す。（例「婚ふ」→「あふ」。）

本文では、「侍り」のみを行書太字体で示す。（ただし、天皇語の「侍り」はゴジック太字体。）

帝の求婚　現代語訳

さて、かぐや姫は、容貌が世に似るものなく美しいことを、帝がお聞き遊ばして、内侍中臣の房子におっしゃる、

「多くの人の身を破滅させても結婚しないと聞くかぐや姫は、どれほどの女かと、**退出して見てまいれ**」

とおっしゃる。房子は、承って退出する。

竹取の家では、恐縮して招き入れて、会う。嫗に、内侍はおっしゃる、

「帝の仰せ言に、かぐや姫の容貌は、すぐれていらっしゃると聞く、よく見てまいるように仰せられるので、参上した」

と言うので、（嫗は）

「**それでは、（姫に）そのように申しましょう**」

と言って、（姫の部屋に）入る。

かぐや姫に、

「早く、帝のお使いにお会いなさい」

と言うと、（かぐや姫は）

「すぐれた器量でもない。どうして会えよう」

と言うので、

「困ったことをおっしゃるね。帝のお使いを、どうしておろそかにできよう」

と言うと、かぐや姫が答えるには、

「帝のお召しになっておっしゃることは、畏れ多いとも思わないの」

と言って、一向に会いそうにもない。

（普段は）産んだ子のようにしているけれど、（嫗が）たいそう気後れするように、（姫が）そっけなく言ったので、（嫗は）思うように責めることもできない。嫗は、内侍の前に戻ってきて、

「**残念なことに、この幼稚な者は、強情でございまして、お会いできそうにありません**」

と申し上げる。内侍は、

「必ず拝見して参れと、仰せ言があったものを。拝見しなくては、どうして帰参できよう。国王の仰せ言を、どうして、この世に住んでおられる人が、承知なさらないでいられよう。言えないことをしなさるな」

と、言葉に威厳を込めて言ったので、これを聞いて、（今までより）まして、かぐや姫は、聞くはずもない。

「国王の仰せ言に背いているなら、はやく殺しなさってよ」

と言う。

この内侍は、帰り参上して、このことを奏上する。帝はお聞き遊ばして、

「大勢の人を殺してしまった（強情な）心よ」

とおっしゃって、（一度は）止めたけれど、

（帝は）やはりお思いがおありで、「この女の策略に負けていられようか」とお思いになって、ご命令なさる、

「お前が持って**おる**かぐや姫を**献上せよ**。器量よしと**お聞き遊ばして**、お使いを**遣わしなさったが**、（それも）かいなく、（お使いは姫の器量を）見られなくなってしまった。このような不都合なことを放っておくことはできない」

とご命令なさる。翁は、恐縮して、ご返事を申し上げるには、

「この女童は、全く宮仕えを致すべくもございませんのを、持て余してございます。そうでございましても、退出して、仰せ言を伝えましょう」

と奏上する。これを（帝は）お聞き遊ばして、仰せになる。

「どうして、翁の手で育て上げたものを、心のままにならぬことがあろう。この女を献上したら、翁に五位を授からぬことが、どうしてなかろうか」

翁は、喜んで、家に帰って、かぐや姫に告げて言うには、

「このように、帝が仰せ言を下さった。お仕えはなさらないのか」

と言うと、かぐや姫が、答えて言うには、

「全く、そのような宮仕えは、お仕え致すまいと思っているのを、無理にお仕えさせなさるなら、消え失せてしまおう。（翁が）官職位階を戴けるようにして、（私は）死ぬばかりよ」

翁が、応じて言うには、

「（そのようなことは）しなさるな。官職も我が子を拝見できなくては、何になろうか。そうではあっても、どうして宮仕えをなさらないのか。死になさらなくてはならぬ理由があろうか」

と言う。（かぐや姫が言う）

「やはり空言かどうかと、宮仕えをさせて、死なないでいるかと、（様子を）ご覧下さい。何人もの人が、（私への）愛情がおろそかではなかったのを、無駄にしてしまった。昨日今日、帝のおっしゃることに従うのは、人聞きがはずかしい」

と言うと、翁が、答えて言うには、

「世間のことは、とかくあっても、姫のお命が危ないことこそ、大きな障害なので、やはり、宮仕えできないことを、参上して申し上げよう」

と言って、参上して申し上げるには、

「仰せ言の忝なさに、あの女童を宮仕えに参らせようと、致しましたが、『宮仕えに出させたら、死ぬ』と申します。私、みやつこまろの手で生ませた子ではありませぬ。昔、山で見つけた子です。気性も、世の人には似ていないのでございます」

と（帝の侍臣を介して）奏上する。

帝が、仰せになる、

「みやつこまろの家は、山の麓に近いとか。鷹狩りの行幸をなさるようにして、見るとしようか」

とおっしゃる。みやつこまろが、申し上げるには、

「たいそうよいことです。なんの、（女童が）ぼんやりしてございます時に、ふと行幸遊ばしてご覧になれば、ご覧になれないことがありましょうか」

と奏上すると、帝は、俄に日にちを決めて、鷹狩りに出立なさって、かぐや姫の家にお入りになって姫をご覧になられると、（家中に）光が満ち溢れて、すばらしく美しく座っている人がいる。「これであろう」とお思いになって、近くにお寄りなさると、逃げて奥に入る袖をお捕らえになるが、顔を（袖で）覆って控えているけれど、最初によくご覧になっておられるので、比べるものもなくすば

らしくお思い遊ばして、

「許すまい」

と、連れて出なさろうとする時に、かぐや姫が、お答えして奏上する、

「自分の身は、この国に生まれてございましたら、（お心のままに）お使いになられましょう、（しかし、そうではないので）全く連れて出なされますことはむずかしゅうございましょう」

と奏上する。帝は

「どうして、そのようなことがあろう。連れていらっしゃろうぞ」

と、お輿をお寄せなさる時に、このかぐや姫は、さっと影になってしまう。「はかなく、残念だ」とお思いになって、「なるほど、普通の人ではなかった」とお思いになって、

「それなら、お供に連れて行くまい。もとのお姿におなりなさい。それを見て帰ろう」

とおっしゃると、かぐや姫は、もとの姿になる。帝は、（姫を）やはりすばらしくお思いになることは、せきとめがたい。このように（姫を）見せたみやつこまろに対し、官位・禄をお与えになる。

そして、（翁の家では）行幸のお供の大勢の官人たちに、饗応を盛大に奉仕する。

帝は、かぐや姫を置いてお帰りなさることを、ご不満で残念に思し召したが、魂を（姫のもとに）止めた気持ちで、お帰りになった。お輿にお乗り遊ばして後に、かぐや姫に、

帰るさのみゆき物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

〈帰り道の行幸がつらく思われて振り返って立ち止まってしまう。（私に）背いて止まるかぐや姫ゆえに〉

（かぐや姫の帝への）返歌、

むぐらはふ下にも年は経ぬる身の何かは玉のうてなをも見む

〈葎の生い茂る中で長年過ごしてきた我が身が、どうして玉に輝く高殿を見てそこで過ごせようか〉

これを、帝はご覧遊ばして、いっそうお帰りになる方向もお分かりにならなくなられる。お心は、更にお帰りになることもお思いになされなかったけれど、そうかといって、（かぐや姫のもとで）夜をお明かしになることもおできにならないので、お帰り遊ばす。

常日頃帝のお側でお仕えする女房たちをご覧なさるにつけ、かぐや姫の側に寄れそうな者もいなかった。「他の人よりは、美しい」とお思いになった人が、あのかぐや姫に思い比べなさると、美人などというたぐいではない。かぐや姫のみお心にかかって、ただ独りでお過ごしになる。理由なくお后たちの所にもお渡りになさらず、かぐや姫のお許に、お文を書いてやり取りなさる。（かぐや姫の）ご返事は、（宮仕えは断ったものの）見事に書いて差し上げ、（帝も）興趣深く、四季折々の木や草に託してもお歌を詠んでお遣わしになる。

帝の求婚　本文

さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを、御門聞こしめして、内侍中臣の房子にのたまふ、

「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて、見てまいれ」

との給。房子、うけたまはりてまかれり。
竹取の家に、かしこまりて請じ入れて、会へり。女に、内侍のたまふ、
「仰せごとに、かぐや姫のかたち、優におはす也、よく見てまいるべきよしのたまはせつるになむ、まいりつる」
と言へば、
「さらば、かく申侍らん」
と言ひて、入ぬ。
かぐや姫に、
「はや、かの御使に対面し給へ」
と言へば、かぐや姫、
「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」
と言へば、
「うたてもの給ふかな。御門の御使をば、いかでかおろそかにせむ」
と言へば、かぐや姫の答ふるやう、
「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」
と言ひて、さらに見ゆべくもあらず。
産める子のやうにあれど、いと心はづかしげに、をろそかなるやうに言ひければ、心のまゝにもえ責めず。女、内侍のもとに還り出て、
「口おしく、このおさなき者は、こはく侍る者にて、対面すまじき」
と申。内侍、
「かならず見たてまつりてまいれと、仰せ事ありつるものを。見たてまつらでは、いかで帰りまいらむ。国王の仰ごとを、まさに、世に住み給はん人の、うけたまはり給はでは有なむや。いはれぬ事なし給ひそ」
と言葉はづかしく言ひければ、これを聞きて、ましてかぐや姫、聞くべくもあらず。
「国王の仰せごとを背かば、はや殺し給ひてよかし」
と言ふ。
此内侍、帰りまいりて、このよしを奏す。御門、聞こしめして、
「多くの人殺してける心ぞかし」
との給て、止みにけれど、
猶おぼしおはしまして、「この女のたばかりにや負けむ」とおぼして、仰せ給、
「汝が持て侍るかぐや姫、たてまつれ。顔かたちよしと聞こしめして、御使を賜びしかど、かひなく、見えず成にけり。かくたい〳〵しくやは慣らはすべき」
と仰せらる。翁、かしこまりて、御返事申すやう、
「此めの童は、たへて宮仕へつかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍。さりとも、まかりて、仰せ事賜はん」
と奏す。これを聞こしめして、仰せ給。
「などか、翁の手におほしたてたらむものを、心にまかせざらむ。この女、もしたてまつりたるものならば、翁にかうぶりを、などか賜はせざらん」
翁、喜びて、家に帰りて、かぐや姫に語らふやう、
「かくなむ、御門の仰せ給へる。なをやは仕うまつり給はぬ」

と言へば、かぐや姫、答へていはく、
「もはら、さやうの宮仕へ、仕うまつらじと思ふを、しゐて仕うまつらせ給はば、消えうせなんず。みつかさかうぶり仕うまつりて、死ぬばかり也」
翁、いらふるやう、
「なし給そ。つかさかうぶりも、わが子を見たてまつらでは、なににかはせむ。さはありとも、などか宮仕へをしたまはざらむ。死に給べきやうやあるべき」
と言ふ。
「猶そら事かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。あまたの人の、心ざしおろかならざりしを、空しくなしてしこそあれ。昨日今日、御門のの給はんことにつかん、人聞きやさし」
と言へば、翁、答へていはく、
「天下の事は、とありとも、かゝりとも、御命のあやうさこそ、大きなる障りなれば、猶、仕うまつるまじきことを、まいりて申さん」
とて、まいりて申やう、
「仰の事のかしこさに、かの童をまいらせむとて、仕まつれば、「宮仕へに出したてば、死ぬべし」と申。宮つこ麻呂が手にうませたる子にあらず。むかし、山にて見つけたる。かゝれば、心ばせも、世の人に似ず**侍**」
と奏せさす。
御門、仰給、
「みやつこまろが家は、山本近かなり。**御狩行幸し給はんや**うにて、見てんや」
とのたまはす。宮つこ麻呂が、申やう、
「いとよき事也。なにか、心もなくて**侍らん**に、ふと行幸して御覧ぜむ、御覧ぜられなむ」
と奏すれば、御門、にはかに日を定めて、御狩に出給ふて、かぐや姫の家に入給ふて見給に、光みちて、きよらにてゐたる人あり。「これならん」とおぼして、近く寄らせ給に、逃げて入る袖をとらへ給へば、おもてをふたぎて候へど、初めよく御覧じつれば、たぐひなくめでたくおぼえさせ給て、
「許さじとす」
とて、いておはしまさんとするに、かぐや姫、答へて奏す、
「をのが身は、此国に生れて**侍らば**こそつかひ給はめ、いとおはしましがたくや**侍らん**」
と奏す。御門、
「などか、さあらん。猶**いておはしまさん**」
とて、御輿を寄せ給に、このかぐや姫、きと影になりぬ。「はかなく、口おし」とおぼして、「げに、たゞ人にはあらざりけり」とおぼして、
「さらば、御ともにいて行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰なむ」
と仰せらるれば、かぐや姫、もとのかたちに成ぬ。御門、なをめでたくおぼしめさるゝ事、せきとめがたし。かく見せつる宮つこ麻呂を、よろこび給。
さて、仕うまつる百官の人ゝ、あるじいかめしう仕うまつる。御門、かぐや姫をとゞめて帰り給はんことを、あかず口おしく覚し

けれど、玉しゐをとゞたる心地してなむ、帰らせ給ける。御輿にたてまつりて後に、かぐや姫に、

帰るさのみゆき物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆへ

御返りごと、

葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉のうてなをも見む

これを、みかど御覧じて、いとゞ帰り給はんそらもなくおぼさる。御心は、さらにたち帰るべくもおぼされざりけれど、さりとて、夜を明かし給べきにもあらねば、帰らせ給ぬ。

常に仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫の傍らによるべくだにあらざりけり。

「こと人よりは、けうらなり」とおぼしける人の、かれにおぼし合はすれば、人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝりて、たゞ独り住みし給。よしなく御方〳〵にも渡り給はず、かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給。御返り、さすがに憎からず聞こえかはし給て、おもしろく、木草につけても御歌をよみて遣はす。

（せき・かずお）